

俄獅子

長唄

全詞章

四世杵屋六三郎 述

〔二上り・鼓歌〕 花と見つ五町驚かぬ人もなし、なれも迷ふやさまざまに
四季折々の戯れは、紋日物日のかけ言葉
蝶や胡蝶の禿俄の浮れ獅子

見かへれば花の屋台に見えつ隠れつ色々の、姿やさしき仲の町
心尽しのナ其の玉章も、いつか渡さん袖の内、心ひとつに思ひ草、よしや世の中
狂ひ乱るる女獅子男獅子の彼方へひらり此方へひらりひらひら

しのぶの峰か襲夜具、枕の岩間瀧つ瀬の、酒に乱れて足もたまらず
他處の見る目も白波や

〔キヤリ〕 ヤア秋の最中の月は竹むら更けて逢ふのが間夫の客ヨイヨイ

〔クドキ〕 辻占みごと繰返し、何故この様に忘れぬ、恥しいほど愚痴になる

というちやア無理酒に、なんでも此方の待人恋のナ恋の山屋が豆腐に銚、しまりの
無いのでぬらくらふはつく嘘ばかりヨイヨイヨイヤナ

〔クドキ〕 宵から待たせてまた行かうとはエエあんまりなと膝たて直し

しめろやレたんだうてやうて、打つはたいこが取持ち顔か、強ねてうつむく水道尻に
お神楽蕎麦ならすこしのびたと囃されて、ちんちんかもの床の内、たんたん狸のそら寝入、
つねつた跡のゆかりの色に、うつて変つた中直り、あれはさこれはさよい声かけヤ

〔引〕 よいやなしどもなや

〔三下り〕 人めしのぶは裏茶屋に、為になるのを振捨てて、深く沈みし恋の淵、心柄なる身の
憂さは、いつそ辛いぢやないかいな

逢はぬ昔がなつかしや

獅子にそひてや戯れ遊ぶ、浮き立つ色のむらがりて、夕日花咲く廓景色目前と貴賤うつつなり
暫く待たせ給へやと宵の約束今行くほどに夜も更けし

〔団乱旋〕 舞子囃羅旋の舞樂もかくや勇む末社の花に戯れ酒にふし、大金ちらす君達の、うてや
大門全盛の、高金の奇徳あらはれて、靡かぬ草木もなきときなれや、千秋万歳万々歳と

豊かに祝す獅子頭